看護学生の実習前後における社会人基礎力の自己評価

Self-evaluation of the Fundamental Competencies for Working Persons before and after the training of nursing students

市　川　裕美子

要約　臨地実習が看護学生の「社会人基礎力」の育成にどのように関連しているかを明らかにすることを目的に、A 短期大学看護学科の学生 6 名を対象に、経済産業省から提示され岐阜大学医学部看護学科が一部改変した能力評価表を参考に作成した評価用紙を用い、2 年次と 3 年次の実習前後に社会人基礎力 4 つの分類 13 の能力要素について調査した。その結果 3 年次実習後では、能力要素すべてにおいて自己評価点は上昇した。

I. は　じ　め　に

経済産業省が推進している「社会人基礎力」とは、「職場や社会の中で多様な人々とともに仕事をしていくために必要な基礎力」と定義され、3 つの能力と 12 の能力要素からなっている。これまで、様々な人との関係や経験を通して身についてきた「社会で活動していくために必要な力」が、核家族化などの社会状況の変化やインターネット・携帯電話などの普及により、直接人と関わらなくても情報を得られる環境になってきたことから、その力を培う機会が少なくなってきているといわれている。

医療の現場では、少子・高齢・多死社会という時代をむかえ、医療の高度化・個人の医療への意識の高まりやニーズなど様々なことに対応していかなければならない。そのためにはチーム医療の推進が重要であり、看護師はチームの中でも一番患者の身近にいる存在として中心的な役割をとることが期待され、社会人基礎力にあげられている力を身につけることが必要になってくる。また、看護師の社会人基礎力は、職場での人との関わりや

八戸学院短期大学　看護学科

様々な研修、看護実践における行動などを通して培われ、チームの中で育てられ成長していく。

看護教育のカリキュラムの中には、臨地実習（以下、実習）が必ず組み込まれる。その目的は、看護実践活動が展開される場においての体験を通して、看護学の知識・技術・態度および倫理についての理論と実際を統合し、多様な健康レベルや生活状態にある人々を総合的に理解し、看護を実践する基礎的な能力を養うことを目的としている。実習中は、チームの一員として学びながら、対象の患者に対し看護活動を実践することになる。

今回、A短期大学看護学科の学生6名を対象に、経済産業省から提示され岐阜大学医学部看護学科が一部改変した能力評価表を参考に作成した評価用紙を用い、実習前後の自己評価から、実習が社会人基礎力にどのように関係しているのかを明らかにすることを目的として調査した結果について考察し報告する。

II. 研　究　方　法

1. 対象

A短期大学看護学科の実習を履修する学生で4回調査のうち全調査に協力が得られた6名

2. 研究デザイン

質的記述的研究

本研究は、平成25年度実習を履修する学生73名を対象に、実習前後（第1・2回目調査）と平成25年度の対象者でかつ平成26年度の実習を履修する学生73名を対象（第3回目調査）に行ったが、回収数が少なく量的分析が不可能となったため、全4回調査のうち第3回目の調査後、これまでの3回全部に協力が得られた学生6名を対象に、質的研究に変更し調査を行った。

3. データの収集方法

1）社会人基礎力の自己評価点

調査用紙は、経済産業省の社会人基礎力3つの能力と12の能力要素に、倫理性を加えた岐阜大学医学部看護学科で使用している4つの能力と13の要素での評価用紙を参考に作成した（表1）。また、4つの能力と13の要素、定義、意味、行動目標をまとめた用紙を作成しそれをガイドとしながら、1〜3点で自己評価し、2年次、3年次の実習前後に合計4回実施した。

(1)　第1回目（以下：2年次実習前）平成25年11月高齢者看護実習を履修する学生73名を対象に実習前の自己評価の提出を求めた。

(2)　第2回目（以下：2年次実習後）平成25年12月高齢者看護実習後の自己評価の提出を求めた。

(3)　第3回目（以下：3年次実習前）平成26年4月専門看護実習を履修し、かつ第1回目と2回目の対象であった学生73名に実習前の自己評価の提出を求めた。

(4)　第4回目（以下：3年次実習後）平成26年12月これまで3回の調査に回答のあった学生6名に実習後の自己評価の提出を

表 1　自己評価用紙（4 つの能力と 13 の能力要素）

	分類	能力要素	現在のレベル	評価の根拠（具体的行動事実） いつ、どんな状況（場面）で、どのように努力または工夫をすることにより発揮（しようと）したと思う、もっと努力や工夫が必要と感じたか
自己分析	前に踏み出す力（アクション）	主体性	1・2・3	
		働きかけ力	1・2・3	
		実行力	1・2・3	
	考え抜く力（シンキング）	課題発見力	1・2・3	
		計画力	1・2・3	
		創造力	1・2・3	
	チームで働く力（チームワーク）	発信力	1・2・3	
		傾聴力	1・2・3	
		柔軟性	1・2・3	
		状況把握力	1・2・3	
		規律性	1・2・3	
		ストレスコントロール力	1・2・3	
	倫理	倫理性	1・2・3	

求めた。

2）　自己評価の根拠となった事柄の記入

評価用紙に、自己評価点した根拠となる事柄を記入する欄を設けた。

3）　半構成面接

実習前後の本人の変化、目標がある活動に関する有効性、その他についてを面接により得た。

4.　分析方法

社会人基礎力能力要素毎に学生個々の点数変化を表にまとめ､学生 6 人の合計点の変化、学生個々の実習前後の合計点の変化をグラフ化する。また、自己評価の根拠に記述している内容をできるだけ意味を変えないよう要約して整理する。

さらに半構成的面接によってえられたデータは、その項目毎に分類・整理する。

5.　倫理的配慮

平成 25 年 10 月八戸学院大学・八戸学院短期大学の研究倫理審査会の承認を得た。その後平成 26 年 10 月研究方法の変更に伴い、同研究倫理審査会に変更届を提出し承認を得た。

III. 実 習 の 概 要

実習は、1年次に基礎看護実習Ⅰ・Ⅱが実施され、2年次11月から専門実習として高齢者看護実習Ⅰ(施設)、高齢者看護実習Ⅱ(病院)、3年次5月～11月までの期間に、成人看護Ⅰ･Ⅱ、精神看護、母性看護、小児看護Ⅰ･Ⅱ、在宅看護、統合看護が実施される。1年次は延べ3週間、2年次は延べ4週間、3年次は延べ16週間の実習である。

IV. 結　　果

1. 配布数と回収数（表2）

配布数は73名、回収数は9～24で、回収率は12.3%～32.8%であった。また、2年次実習後の回答者22名は、2年次実習前と同じ回答者であったが、3年次実習前の回答者は3名が当該一回のみの回答者であった。

2. 分析対象の属性

男子学生1名、女子学生5名　学生の年齢は20～21歳で社会人経験者はいなかった。

3. 社会人基礎力能力要素毎の学生個々の合計点数の変化（表3）と学生個々の実習前後の合計点の変化（図1）

学生A: 2年次実習後柔軟性が1点下降し、3年次実習前では2年次実習後より7点下降したが、3年次実習後では11点上昇した。

学生B: 2年次実習後に能力要素8項目について各1点上昇し合計点が8点上昇したが、3年次実習前に2点下降し、その後3年次の実習前後では柔軟性が1点上昇、規律性が1点下降し合計点数では変化がなかった。

学生C: 2年次実習後に主体性とストレスコントロール力が各1点上昇したが、3年次実習前ではストレスコントロール力を含む5項目で各1点、合計5点の下降があった。3年次実習後では、7項目各1点、合計7点上昇した。

学生D: 2年次実習前から3年次実習前の3回の合計点は、25～27点であまり変化がなかったが、3年次実習後では35点となり8～10点の上昇であった。

学生E: 2年次実習後に傾聴力が1点上昇したが、計画力とストレスコントロール力が下降し合計点が1点下降した。しかし3年次実習前の合計点は、この1名の学生のみ前2回よりも高い点数であり、さらに3年次実習後の合計でも7点の上昇であった。

学生F: 2年次・3年次の実習前の合計点は25～26点であり、実習後には38～39点と上昇した。3年次実習後では、すべての能力要素において上昇した。

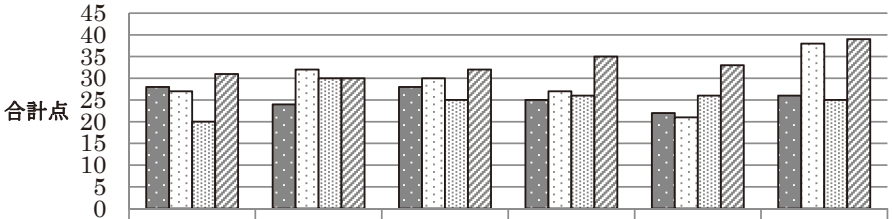
表2　配布数と回収数

	配布数	回収数	回収率
2年次実習前	73	24	32.8%
2年次実習後	73	22	30.1%
3年次実習前	73	9	12.3%
3年次実習後	6	6	100%

表３　社会人基礎力能力要素毎の学生個々の点数

□下降　■上昇　　単位：点

分類	能力要素	学生 A				学生 B				学生 C				学生 D				学生 E				学生 F				横合計			
		2 前	2 後	3 前	3 後	2 前	2 後	3 前	3 後	2 前	2 後	3 前	3 後	2 前	2 後	3 前	3 後	2 前	2 後	3 前	3 後	2 前	2 後	3 前	3 後	2 前	2 後	3 前	3 後
前に踏み出す力（アクション）	主体性	2	2	1	3	2	2	2	2	1	2	2	2	1	2	2	2	1	1	2	2	2	3	2	3	9	12	11	14
	働きかけ力	2	2	1	2	1	2	2	2	2	2	2	2	1	2	1	3	1	1	2	2	2	2	2	3	9	11	10	14
	実行力	2	2	2	2	2	3	2	2	2	2	2	2	2	3	2	2	1	1	2	3	3	3	2	3	12	14	12	14
考え抜く力（シンキング）	課題発見力	2	2	2	2	2	3	2	2	2	2	2	2	2	2	2	3	2	2	2	2	2	3	2	3	12	14	12	14
	計画力	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	3	2	1	2	3	2	1	2	3	2	3	2	3	12	11	12	16
	創造力	1	1	1	2	2	3	3	3	2	2	1	2	2	2	1	2	2	2	1	2	2	3	2	3	11	13	9	14
チームで働く力（チームワーク）	発信力	2	2	1	1	1	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	1	1	2	2	2	3	2	3	10	12	11	12
	傾聴力	3	3	2	3	2	3	3	3	3	3	2	3	3	3	3	3	2	3	2	3	3	3	1	3	16	18	13	18
	柔軟性	3	2	1	3	2	2	2	3	2	2	2	3	2	2	1	3	2	2	2	3	1	3	2	3	12	13	10	18
	状況把握力	2	2	1	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	3	2	3	2	2	2	2	2	3	2	3	12	14	11	14
	規律性	3	3	2	3	2	3	3	2	3	3	2	3	2	2	3	3	2	2	2	3	2	3	2	3	14	16	14	17
	ストレスコントロール力	2	2	2	3	2	2	2	2	2	3	2	3	2	2	2	3	2	1	2	3	1	3	2	3	11	13	12	17
倫理	倫理性	2	2	2	3	2	3	3	3	3	3	2	3	2	1	3	3	2	2	3	3	2	3	2	3	13	14	15	18
	縦合計	28	27	20	31	24	32	30	30	28	30	25	32	25	27	26	35	22	21	26	33	26	38	25	39				
		2 前	2 後	3 前	3 後	2 前	2 後	3 前	3 後	2 前	2 後	3 前	3 後	2 前	2 後	3 前	3 後	2 前	2 後	3 前	3 後	2 前	2 後	3 前	3 後				
		A				B				C				D				E				F							



	A	B	C	D	E	F
2前	28	24	28	25	22	26
2後	27	32	30	27	21	38
3前	20	30	25	26	26	25
3後	31	30	32	35	33	39

図 1　学生個々の実習前後の合計点

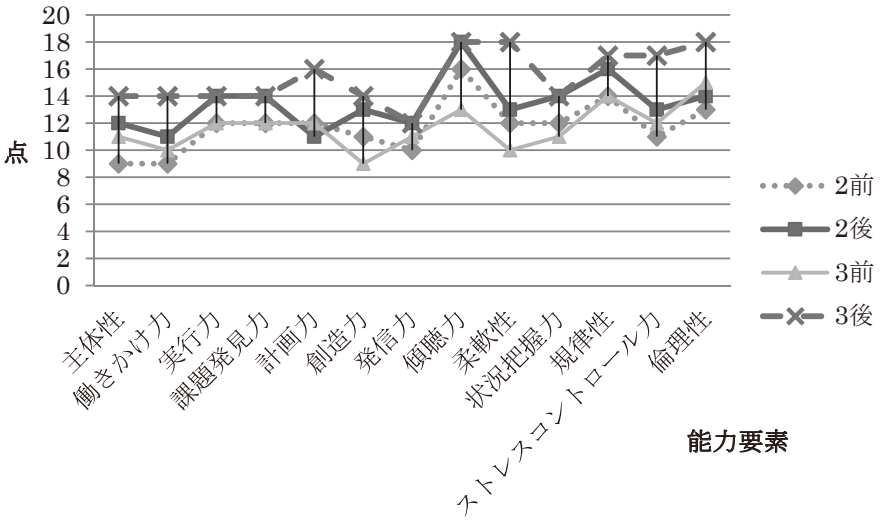


図 2　各能力要素毎実習前後 6 人の合計点の変化

4.　各能力要素毎実習前後 6 人の合計点の変化（図 2）

1）　2 年次実習前と 2 年次実習後では、12 項目で 1〜2 点上昇、1 項目計画力で 1 点下降であった。

2）　2 年次実習後と 3 年次実習前では、1 項目倫理性で 1 点上昇、12 項目において 1〜5 点下降で、5 点下降は傾聴力、4 点下降は創造力であった。

3）　3 年次実習前と 3 年次実習後では、13 項目すべてで 1〜8 点上昇であった。8 点上昇は柔軟性、5 点上昇は傾聴力であった。

4）　2 年次実習前と 3 年次実習後では、すべての項目で 2〜6 点上昇であった。

5）　実習前と実習後の自己評価では、ほぼすべての項目で実習後の評価点は上昇であった。

5. 自己評価の根拠となった事柄（表 4）

表 4　自己評価の根拠となった事柄　*(　) 内のアルファベットは学生を示す

分類	能力要素	2 年実習前	2 年実習後	3 年実習前	3 年実習後
前に踏み出す力（アクション）	主体性	・全般的に踏み出す力がない。分かっているが一歩が出ない。(D) ・すすんでリーダーをした。(F)	・主体的な学習ができなかった。(B) ・はじめはなかなか病室にいけなかったが、教員のサポートなどによりいけるようになった。(D)	・事前学習の不足。(A) ・実習や国試にむけた意欲と学習時間は増えた。(D) ・もっと積極的になることが必要。(D)	・分からないことを指導者や教員に聞くことができた。(E) ・グループリーダーやカンファレンスにより主体性が増した。(B) ・実習前後の学習を積極的にできた。(C)
	働きかけ力	・分かっているができない。	・はじめは病室に行くことができなかったが、サポートをうけ徐々に積極的になれた。(D)	・相手の思いを上手に表出させることができなかった。(A) ・課題をチームで共有し成長につなげた。(F)	・対象の生活改善について、傾聴し一緒に考えることが出来た。(C) ・グループ間で協力することで、働きかける力を向上できた。
	実行力	・実行するときに不安になることがある。(D) ・改善点は進んで直そうとした。(F)	・積極的にコミュニケーションがとれるようになった。(C) ・時間管理して計画を実行できた。(F)	・計画を立て実行できた。(A) ・情報を取ることだけに集中してしまい、聞きたいことだけ聴く傾向にある。いろんなことを話題にする。(D)	・考えはするが、実行にうつすことができなかった。(B) ・積極的に行動できた。(C)
考え抜く力（シンキング）	課題発見力	・分からなくなると、適当に考えてしまう。 ・自分に足りないところを見つけた。(F)	・分からない部分が多かった。(D) ・情報収集の不足があった。(D) ・看護問題・看護計画は難しかった。(C)	・カルテだけではなく、主観的情報や客観的情報から問題を考えることが出来た。(F)	・傾聴していく。 ・指導により、課題を発見できた。(CE) ・参考書などを積極的に活用し分析できた。
	計画力	・詳しく書くことで納得につながる。(D)	・看護計画が難しかった。(C) ・時間管理の力が向上した。(F) ・時間管理をして必要な援助を行う。実施後の効果・反応をみて次の課題を発見できた。(F)	・参考書の引用が多かった自分の考えを含めながら取り組む。(A) ・日々の計画を修正することが不足している。(D) ・柔軟に考える。(D)	・患者にあった計画を立案できた。(E) ・対象の状態に合わせ、優先順位や援助を考えることが出来た。(C) ・臨機応変に対応することの必要性を学んだ。
	創造力	・看護過程の展開ができていない。(A) ・知識が不足のため、あまりできない。	・対象者の状態に合わせたコミュニケーションの方法を工夫できた。(F)	・新しい方法を工夫する能力に欠ける。(D) ・対象者の発達段階、個別性に合わせた方法を考え実施した。(F)	・個別性をいかすことができた。(AC) ・工夫ができた。 ・個別性のある指導、パンフレットの作成ができた。(E)
チームで働く力（チームワーク）	発信力	・相手に伝える気持ちはあるが言葉にできない。(A) ・自分からというのが苦手。(D)	・予定を相談して、行動できた。(A) ・カンファレンスで発言ができなかった。(BC)	・緊張すると言葉として表すことができない。(A) ・考えをまとめるようにする。(A) ・質問をできるようにする。(D)	・自分の意見をまとめて発言できなかった。(A) ・あまり自分からはできなかった。(B) ・カンファレンス等で必ず 1 回は発言するように努力した。(C)
	傾聴力	・人の話を聴くのは好き。(D)	・以前より話を聞いたりすることはできるようになった。(D)	・対象の表情や話し方を観察しながら取り組む。(A)	・積極的なコミュニケーションなどで思いを聞くことができた。(C)
	柔軟力	・柔軟に考えることが出来ない。(D) ・1 つのことに集中してしまう。(F)	・情報収集で直接的なことしか聞けず、柔軟性を磨く必要がある。(D)	・相手の考えも尊重する。(A) ・相手の気持ちになって理解ことが不足していた。(D) ・柔軟性は欠ける。(D)	・意見を取り入れて、考え実践できた。(C) ・臨機応変に対応できた。 ・患者の状態をみて計画を修正できた。(E)
	状況把握力	・今どうするべきかを把握することはできると思う。(D)	・カンファレンスの司会などでうまくできなかった。(C)	・自分のことだけでなく、他職種とも事前に打ち合わせる。(A) ・他者の発言をさえぎったりせず、状況を考慮して行動できた。(D)	・対象の状態に合わせて援助ができた。(C) ・自分がとるべき行動について考え行動できた。 ・報告は端的にできた。(A)
	規律性		・看護師や患者に挨拶をすることができた。(B)	・敬語を使えるようにする。(A) ・施設の規則、学生としての自覚を持って行動している。(DF) ・施設のルールも守っている。(D)	・規律は守り、問題はなかった。(C) ・時間を守る、服装や言葉遣いなど実習生としての自覚をもち実行できた。(AE)
	ストレスコントロール	・ストレス解消には笑うこと。(D) ・著しく体調を崩した。(F) ・メンタルが弱い。(D)	・実習中つらいときに、グループメンバーや教員などいろいろな人に支えられ乗り越えられた。(D)	・睡眠をとるようにする。(A) ・友達からの助言や休養により前に進もうと切り替えられた。(D)	・ストレス対処が適切にできた。 ・忙しいとコントロールできなくなる。(B) ・好きなことをする。友達と食事にいく。(AE) ・公私を区別して行うことができた。(A)
倫理	倫理性		・守秘義務を遵守できた。(BC) ・慢性期の患者をうけもち、生や死、QOL について考えることが出来た。(F)	・守秘義務の遵守。(A) ・対象者に苦痛を与えないような配慮をして援助できた。(F)	・守秘義務の遵守。(ACE) ・対象の苦痛緩和にむけて取り組めた。(F)

6. 半構成法面接の結果（表5）

表5　半構成法面接による結果

1. 実習後の本人の変化 ※実習を終了して、その前までの自分と現在の自分で、実習をしたことで、社会人基礎力が向上したことや向上まではいかなかったこと	【向上したこと】 ・自分の意見に根拠を持ち話すことができる。 ・実習中と日常での気持ちの切り替えをすることができた。 ・実習を重ねるごとに、相手の表情や心情を読み取り、分析につなげることができた。 ・言葉遣いや相手への接し方に気をつけるようになった。 ・実習により、主体性、チームワークは向上した。 ・対象者に合わせたコミュニケーションがとれるようになった。 ・何でもひとりで解決するのではなく、教員やチームメンバーに相談できるようになった。 ・挨拶やコミュニケーションなどの基本的なこと。 ・計画力やストレスコントロールは向上した。 ・人とのかかわりを通して、思いやりなどについて考えることが出来た。 ・看護に積極的に取り組む姿勢を学べた。 【向上までいかなかったこと】 ・多方面から患者に与える影響についての、看護の視点が狭かった。 ・ストレスコントロールは、実習前の方が高かった。 ・カンファレンスなどでの発言はできるようになったが、まだまだ努力が必要である。 ・対象者によってコミュニケーションを避けようとしてしまうこと。
2. 現在および就職活動・国家試験など達成すべき目標がある活動に関する有効性 ※実習がもたらした社会人基礎力への影響は、就職活動や国家試験に有効性があると思うか。どんな点が有効か。	【有効である】 ・自分の意見を話すことができること。 ・マナーを守れること。 ・ストレスをためないための、気持ちの切り替えができること。 ・1つのことに集中することができたこと。 ・チームワークが有効だと思う。 ・人としてのマナーを学ぶことができた。 ・勉強に取り組む姿勢が変化し、目標達成に向けて取り組めるようになった。 ・実習での経験は、国家試験にとても参考になる。 ・挨拶、身だしなみ、言葉遣いなどは就職活動でも役立つ。 ・知識が増えた。 ・課題に前向きに取り組めるようになった。
3. その他 ※社会人基礎力そのものに関する思いや育てるための方法などについての思いなど	・自分の言動を日々振り返ることが大切だと感じた。 ・成長するためには、意識することが大切だと思う。 ・社会でのルールやマナーを守ることが大切で、実習ではそのことを学べる。

V. 考　　察

1. 実習前後の時期的にみた考察

今回の研究は、4つの能力13の能力要素について、計4回学生が主観的に自己評価を実施した。学生個々の点数（表3）と学生個々の実習前後合計点（図1）からみると、2年・3年とも実習後は合計点が上昇しているが、2年次実習後から3年次実習前の約5ヶ月で2年次実習前と同じレベルまで下降している。これは、4週間の実習の中で培われた能力ではあったが、講義中心の授業に戻ったことで緊張感や動機付けが少なくなったことからではないかと考える。箕浦、高橋（2012、p 76）は、社会人基礎力の育成は「人との交流、異質な世界との出会いや評価を体験させ

ること、それ自体が育成の過程そのものである」と述べている。学生にとっては実習という非日常から、大学という日常に戻ったことで、意識して行動することが少なくなった結果と考えられる。

3年次実習後の評価は、能力要素すべての項目について自己評価点が上昇し、合計点でも伸び率が一番高かった。実習の期間は2年次延べ4週間、3年次延べ16週間の実習であり、実習中はチームの一員として学びながら対象の患者に対し看護援助を実践する。3年次の長い期間を通しての実習は、人とのかかわりも必然的に多くなり、実習経験を重ねるごとに社会人基礎力が培われていていると考えられる。社会人基礎力は、人間性や基本的な生活習慣を土台にした上で、基礎学力や専門知識と一体となった能力であり、単に期間的なことが影響しているとは言えないが、多くの人との交流や実習での体験が社会人基礎力の能力向上に関係していると考える。

2. 能力要素からみた考察

能力要素毎の結果では、3年次実習後ではいずれの要素も上昇している。実習では、患者への働きかけ力、患者や自分自身の課題発見力、看護援助を考える計画力、それを実行する主体性や実行力に加え、実習施設の看護師や他職種との関係、チームワークに含まれる要素が重要になる。看護過程を展開していく中でそれらの要素が培われていくと考えられる。

学生の根拠となった記述にあるように、学生同士で助け合ったり支え合ったりすることで、チーム力が向上したことは実習がチームで働く力に影響しているといえる。チームで働く力の要素にある柔軟性については、相手の考えも尊重する、意見を取り入れて考え実践できたなどの記述から、実習を重ねるごとに知識や技術が増え、実習の進め方などのコツがつかめてきたことで向上していったのではないかと考える。

ストレスコントロールについてはそれぞれ実習後上昇しており、グループメンバーと話すや睡眠、適切に対処できたなど、学生個々に対処の方法を見つけていた。看護師にとって、仕事の大変さや離職率などからみても、ストレスコントロール力は非常に大切であり、実習というストレスフルな中で、適切な対処方法を見出しコントロールできていたことは、今後社会人となった時にも役立つと考えられる。

3. 半構成法面接からの考察

実習後の評価では概ね、社会人基礎力の要素としては向上していた。主体性やチームワーク、コミュニケーション力が向上したなどである。看護に積極的に取り組む姿勢を学べたという社会人基礎力が深化したと思える内容の答えもあった。就職活動や国家試験に対しても、実習を通して得た知識や技術が増え、それが自信となることによって自分から発信することができるようになったと考えられる。自分が成長するためには意識することが大切だという意見もあり、社会人基礎力の能力要素を意識していくことの大切さを学んでいた。全体的には、社会人としての基本的なマナーや規則についても考え行動し、学ぶことができていた。

VI. 結　　論

1. 3年次実習後では、能力要素すべての点数が上昇し社会人基礎力の能力は向上した。

2. 3年次実習前でほぼ全員の合計点が下降し、実習後時間が経つと社会人基礎力の能力は下降した結果となった。

3. 能力要素別では、2年次実習前と3年次実習後では、すべての項目において上昇し、特に柔軟性とストレスコントロール力は、6点の上昇であった。倫理性については調査回毎に上昇していた。

4. 実習は社会人基礎力を向上させることにつながり、達成すべき目標がある活動にも有効であった。

VII. お　わ　り　に

今回の研究ではデータ数が少なく、実習が社会人基礎力向上にどの程度関係しているかを量的に示すことはできなかった。学生の主観的評価ではあるが、少なくとも実習により主体的に考えて行動する力や対象患者の看護過程を展開していくことで、課題発見力や計画力は向上した。また、グループの中で支えあったり、意見交換をしたりとチームで働く力の能力も向上していた。

社会人基礎力は実習だけで育成することは難しいが、社会人基礎力を意識して行動し、自分がどう変わっていくかが大切だと考える。今後は、学内の講義やゼミ活動などでも、社会人基礎力の能力と能力要素を意識しながら、一層の能力向上に向けて指導していきたいと考えている。

VIII. 謝　　辞

この研究に協力していただいた皆様に感謝いたします。

IX. 引用参考文献

1. 箕浦とき子、高橋　恵:『看護職としての社会人基礎力の育て方』日本看護協会出版会、2012.
2. 高橋　恵他:「社会人基礎力の育成」『看護展望』2013. 6. 4-46.
3. 「シリーズ教育改革 ing 社会人基礎力」『Guideline』2010. 34-42.
4. 北島洋子他:「看護系大学生の社会人基礎力の構成要素と属性による相違の検討」『大阪

府立大学看護学部紀要』2011. 17-1. 13-23.
5. 吉田　悟 :「高等教育における感情教育の重要性」『REBT 研究』1-1. 11-27.
6. 「社会人基礎力育成の手引き―日本の将来を託す若者を育てるために　教育の実践現場から―」河合塾、http://www.wakuwaku-catch.com（2015 年 2 月 17 日現在）